

もっとキチガイ的な女の子が入部してくることを 望むものである。

洞窟班の流れ

八 木 秀 樹

44年に奴奈川洞で大惨事に会い、その雪辱戦とも言ふべき第7次青海洞窟群調査を45年8月奴奈川洞再アタックという形で試みた結果、入洞期間3日間という驚異のスピードで、奴奈川洞の全貌を、我々の前に引きずり出した。千里洞においては、第5次調査隊でようやく最深部に到達している。これは、何を意味しているのかと言えば千里洞において、ほとんど竖穴技術に関しては、第1次より始めたと言ってもよい、そして、千里洞がその技術の練磨の場として、又竖穴洞窟探検の限界は如何にといったふうに、たえず第1次～第5次調査隊において、我々洞窟班に対する問いかけである。そして千里洞が我々に与えた諸々の試練を我々が面と向ってぶつかり、これを克服してきた。この行為が我々に対し、歴史の重みとしてほぼ完璧なまでの竖穴技術を残していった。そのことが奴奈川洞を、ああも短期間で、終えさせた最大の原因である。このことは、46年度の銀鳳洞の第一次調査隊で-330mの最深度に到達していることをみても明らかであろう。そういった観点より、洞窟班の歴史は、およそ3つに分けられるのではないだろうか。すなわち第1期として35年滋賀県多賀町河内風穴洞に始まり千里洞が始まるまで、そしてこの第1期後期の態石洞をワンステップとして、第2期に入る。第2期は千里

洞東1次～第5次調査隊40年～43年である。そして第3期として第2期の千里洞が、我々に残したものをフルに生かしマイコミ平解明に拍車がかけられた時期であり、奴奈川洞、銀鳳洞を経て47年の沢穴、白蓮洞と続くのである。

第3期の特徴は、銀鳳洞をやり終えた時、隊のメンバーは、すでに千里洞にたずさわった人間もなく、ただ竖穴入洞技術もフィールドも歴史の重みとして我々の目の前にあるだけである。そしてそこには何ら創造主体としての自らのフロンティア精神の発揮する余地が残されていなかった。そして、自らがフロンティアであることを放棄することであるという観念が誰言うとなしに、班員全体をおおった。そういった自覚が千里洞の流れの終りでもあり、第3期の始まりでもあった。

すなわち、行動として46年の八ヶ岳厳冬期登山サポート、青海マイコミ平積雪期偵察といったふうに表われた自覚が、具現化されつつある。今後こういった方向といったものがさらに、延長され、また、それにとまなう困難を克服していく過程が、来たるべき、第4期をよりすばらしく、よりあるべき姿として、洞窟探検の可能性を、押し開いていくことであろう。

(工学部3回生)